# 幻の焼き物を作りたい
# 石黒 宗麿

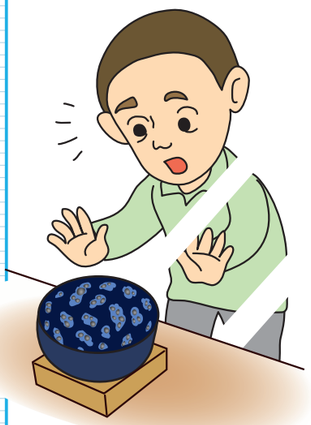
中国の古い陶磁器を研究　木の葉天目茶碗を再現　人間国宝の陶芸家

1893（明治26）年4月14日―1968（昭和43）年6月3日

## 子どものときから手先が器用

射水郡作道村（現射水市）の医師の長男に生まれました。子どものころから身体が大きく力持ちでした。手先が器用で粘土細工や絵を描くことも好きでした。県立富山中学校（現県立富山高校）で、生徒がストライキを起こす事件があり、宗麿はストライキをやめさせようとした先生を殴り、中退させられています。

少年時代の宗麿



## 自分の手で「曜変天目茶碗」を作りたい

宗麿は東京の中学校へ移り、慶応義塾へ進みましたが中退してしまいました。東京の会社に勤めた後、20歳になって軍隊に入り、朝鮮で軍隊生活を経験しました。そのころ、朝鮮の古い陶磁器（粘土に石英などの粉末を混ぜて練り固め、焼いたもの）を見て、陶磁器を作る技術に興味をもちました。

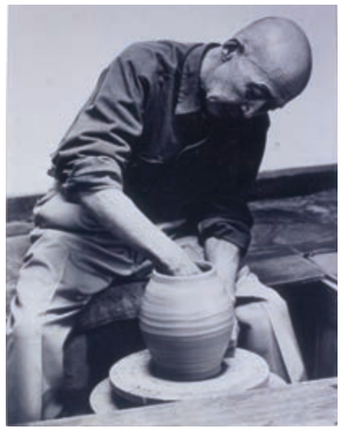
1916（大正5）年、宗麿は故郷に帰り、父が趣味で作った楽焼（低い温度の火で焼く陶器）の窯でロクロの練習をしたり、作品を焼いたりするようになりました。

東京の焼き物の展示会で「曜変天目茶碗*」を見た25歳の宗麿は、強い感動を受けました。天目茶碗は、茶碗の内側に光を当てると、七色の虹のような輝きを放ちます。宗麿は「こんな素晴らしい陶芸品を自分の手で作ってみたい」と陶芸の道を志す決心をしたのです。

## 宋の陶磁器を研究

宗麿が京都の蛇ケ谷という所へ移り住んだとき、家の近くに有名な京焼の陶工、真清水蔵六と弟子の小山富士夫が住んでいました。小山は後に世界的な陶磁器研究家になった人です。宗麿と小山は中国の陶磁器の中でも特に宋の時代の焼き物の魅力を語り合い、ともに研究を深めました。

京都の蛇ケ谷から八瀬へ移ってから、宗麿は「木の葉天目茶碗」の制作にとりかかりました。窯で焼くときに木の葉を置いて葉っぱの模様を浮かび上がらせたもので、中国の宋の時代に盛んに作られましたが、今ではその製法を知る人がいません。宗麿は「人にできることが自分にできないはずがない」と食事も寝るのも忘れて制作に励みました。



制作中の宗麿

＊曜変天目茶碗【ようへんてんもくちゃわん】　南宋時代に中国福建省建陽市にあった窯で作られたとされ、天目茶碗のうちの最上級とされます。日本にだけ数点が残っており、国宝や重要文化財に指定されています。



## パリの展覧会で世界的評価

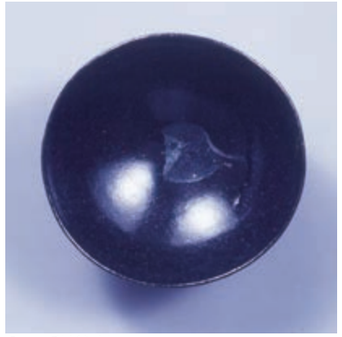
何度も失敗してあきらめかけていたとき、たき火の中に置いたムクの葉が灰になっても形が崩れないことにヒントを見つけました。天目茶碗に使ううわぐすり（釉薬）を素焼きの茶碗にかけ、土と灰で作ったうわぐすりでまぶしたムクの葉を置いて焼いてみました。すると、葉の形がきれいに残ったのです。

宗麿の「木の葉天目茶碗」は陶芸界に衝撃を与えました。それ以来、宗麿はさまざまな技法を編み出し、独特の感じをかもし出す作品を次々と発表していきました。

1950（昭和25）年、パリで開かれた現代日本陶芸展で「失透釉鉄流文壺」「白地チョーク描ばら文鉢」などが高く評価され、宗麿の名は世界に知られるようになりました。

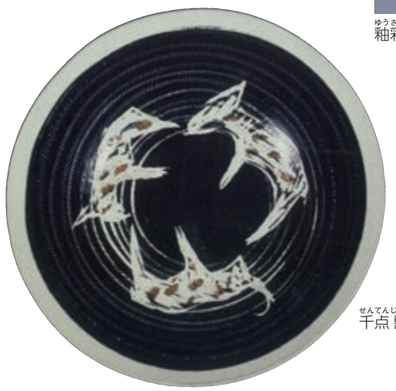
1955（昭和30）年、宗麿は「人間国宝」に認定されました。

宗麿は生涯に一度も決まった師匠をもたず、自分で勉強して失敗と成功を繰り返しながら独自の芸術の世界をつくり上げたのです。



木の葉天目茶碗（射水市新湊博物館蔵）

釉彩千柿文壺（射水市新湊博物館蔵）



千点獣文鉢（射水市新湊博物館蔵）

### 夢や志をかなえたポイント！

- 古いものにあるよさを見つける
- あきらめずに挑戦し続ける
- 新しいやり方を考える

**1893（明治26）** …… 0歳
射水郡作道村に生まれる

**1911（明治44）** …… 18歳
県立富山中学校を退学し慶応義塾普通部に転学

**1913（大正2）** …… 20歳
陸軍に入隊

**1916（大正5）** …… 23歳
故郷へ帰り楽焼の窯で作品を作り始める

**1918（大正7）** …… 25歳
東京で焼き物の展示会を見て陶芸家を志す

**1937（昭和12）** …… 44歳
パリ万国博覧会に出品して銀賞を受賞

**1943（昭和18）** …… 50歳
「木の葉天目茶碗」を完成させる

**1950（昭和25）** …… 57歳
パリの現代日本陶芸展に出品

**1955（昭和30）** …… 62歳
重要無形文化財保持者（人間国宝）に選ばれる

**1956（昭和31）** …… 63歳
新湊市の名誉市民に選ばれる

**1968（昭和43）** …… 75歳
京都の自宅で亡くなる

### コラム
### 漆芸の可能性を広げた山崎覚太郎

山崎覚太郎は上新川郡岩瀬町（現富山市）に生まれ、県立工芸学校（現県立高岡工芸高校）、東京美術学校（現東京芸術大学）をいずれもトップの成績で卒業しました。

蒔絵が主流だった日本の漆工芸界の中で、鮮やかな色の漆を使って絵画のような表現方法を確立し、芸術としての漆芸の可能性を広げました。芸術院会員や文化功労者に選ばれています。

山崎覚太郎作「残映」（高岡市美術館蔵）

豆知識　宗麿は石黒信由（→20ページ）の子孫です。新湊市（現射水市）の名誉市民第1号に選ばれました。